

誰も書かなかつた
日本陸軍

元陸軍特別幹部候補生

浦田耕作

誰も書かなかつた

日本陸軍

元陸軍特別幹部候補生

浦田耕作

誰も書かなかった日本陸軍

2003年8月11日 第1版第1刷発行

著者	浦田耕作
発行者	江口克彦
発行所	P H P 研究所
東京本部 〒102-8331	千代田区三番町3番地10
	学芸出版部 ☎03-3239-6221
	普及一部 ☎03-3239-6233
京都本部 〒601-8411	京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE	http://www.php.co.jp/
印刷所	凸版印刷株式会社
製本所	

© Kosaku Urata 2003 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合は送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-62967-9

はじめに

愛国少年

健康で体力があれば、国家と国民を守るために、国家に命を捧げる軍人を目指すのが、大正末期から昭和初期にかけて生まれた少年の、ごく普通の考え方だった。いわゆる愛国少年である。私も、その一人であった。

生まれたのが、昭和四年三月十日、図らずも大日本帝国の陸軍記念日である。

子供のころから赤いハチマキの真ん中に金の星章がついた陸軍の軍帽をかぶるのが大好きで、近所の人たちからは、「兵隊坊や」とあだ名されていた。

小学生のころも、おもちゃのサーベルや双眼鏡やピストルや鉄帽を持っていて、兵隊ごっこが大好きで、模型飛行機を作っては飛ばし、雪の日には庭に雪を固めて陣地や塹壕を作り、おもちゃの戦車を走らせるのが楽しみだった。

『少年倶楽部』に連載される戦争の小説を読むのも楽しみであった。

単行本では、山中峯太郎さんが建川美次陸軍中尉（後に陸軍中將）と六勇士の、日露戦争の冒

険と武勲を書いた『敵中横断三百里』をはじめ、『亜細亜の曙』は愛国心と勇気を、南洋一郎さんが書いた『ルックネル艦長』は、冒険心をかき立てた。

また、教育総監部監修の陸軍幼年学校や陸軍予科士官学校を志望する人たちの手引書『輝く陸軍将校生徒』を読み、過去十年間の試験問題を繰り返し試してみた。

漫画は、野良犬の主人公が、猛犬連隊に入営し、二等兵から大尉まで進級する田河水泡さんの『のらくろ』が大好きだった。大尉で辞めて民間人ならぬ民間犬になったのにはがっかりした。もっとも、少佐になれば大隊長で、いわゆる上長官だから、身軽には動けないし、面白い失敗もできない。

京都の第十六師団の秋期演習などで、亀岡盆地に大部隊が展開し、歩兵中隊が田圃一面に散開し、機関銃がダッダッダッと空包を撃ち、戦車隊の軽戦車が軍用語では無限軌道と呼ばれていた芋虫を意味するキャタピラの音も軽快に、砂塵を巻き上げて走り、通信隊が天幕を張って通信所を設け、将校が電話で連絡を取り、高翼単葉の偵察機が地上すれすれに飛んできて、通信筒を落とし、背は低いのががちりとした兵隊さんが揃っている輜重隊が、馬の手綱を握り車輪の音を響かせて駆けて行く姿を見て、血わき肉躍る思いがした。

昭和十六年二月に受験した同志社中学の入学試験の際に、海軍大佐だった野村仁作校長先生と配属将校の今井司中尉の最終面接で、「将来、何になりたいのか」と質問されて、即座に胸を張って「軍人になります」と、答えたほどであった。

大東亜戦争（連合国側では太平洋戦争）が始まった昭和十六年十二月八日の朝、新聞も見ずラジオも聞かずに登校して、教室で級友たちが騒いでいるので、米英蘭との開戦を知った。

中学の一年生では、馬術部に入って乗馬を練習し、一応乗れるようになったので、二年生からは射撃部に移った。

空気銃の射撃は、一〇メートル以内ならほとんど百発百中で、小学生のころから得意であった。中学二年生の夏、第十六師団の大亀谷射撃場で、生まれて初めて初めて小銃の実弾射撃をした。

同志社中学に五挺しかない射撃競技用の命中率の良い三八式歩兵銃で、二〇〇メートルで三発撃って二十七点を記録し、自信を持った。

弓は得意だったし、和船もボートも漕げた。水泳と剣道は人並みだったが、銃剣術は軍事教練で基礎を習っただけで、腕前はわからなかった。柔道は習わなかったので知らない。

昭和十八年になると、戦局も険しくなった。

近所の煙草屋さんの息子さんと、ブーゲンビル島で高射機関銃隊の中隊長として戦い、休暇で帰ってきた中川大尉の話聞いた。大木の陰に隠れる兵士を、艦載戦闘機が執拗に追い回して狙い撃ちするという航空戦の激しさを知った。

昭和十八年の秋には、文科系学生の徴兵猶予停止が発表され、同志社大学に進んでいた中学の先輩たちが入営した。

このころになると、学校も勉強が半分と勤労奉仕が半分の生活になり、三条通にあった日本銀

行の裏庭に防火用水池を作ったり、京都のあちこちに防空壕を掘ったりした。

将来は、陸軍予科士官学校を受験しようと考えていて、そろそろ受験勉強を始めなければと思っていたが、受験するには少し間があった。

父が同志社大学の法学部経済学科で、昭和初期に習った『陸軍刑法・陸軍懲罰令』や『兵語の解』や軍事教練の教科書を読み、烏丸六条にあった小林軍用品商会へ行つて、『步兵操典』や『剣術教範』や『軍隊内務令』などの典範令を買つてきて、楽しみに読んでいた。この知識が軍隊に入ってから役立つた。

親友の奥田光信さんの兄さんが、後に飛行第四十七戦隊長になる奥田暢^{のぶ}少佐である。そのころは、暢さんは、陸軍幼年学校から陸軍士官学校を卒業し、大尉で大阪の大正飛行場（現在の陸上自衛隊八尾駐屯地・中部方面航空隊）にあつた飛行戦隊の将校になっていた。時々亀岡盆地の上空で迎撃の訓練を行つていて、光信さんと一緒に、暢さんの横転や宙返りや木の葉落としの飛行ぶりを見る機会があり、戦闘機の搭乗員になりたくなつた。

戦後になって、奥田暢さんが奈良にある航空自衛隊幹部候補生学校に勤務しておられたところに聞いた話では、郷土訪問飛行ではなくて、京都や阪神工業地帯を防衛するために、亀岡盆地から福井県にかけての空中戦を予測し、気流の状態などを調べておられたのだった。

昭和十七年に少年飛行兵を志願したが、身体検査の際に蛋白尿が出て、不合格になった。精がつくようにと生卵をのみ過ぎたのが原因であつたらしい。

昭和十八年に、再び陸軍少年飛行兵を受験した。

口頭試問と身体検査に合格し、学科試験を受けた。良く書けたつもりだったのに、私には採用予定者の通知が来なかった。てっきり不合格になったものとあきらめた。

昭和十八年十二月十四日に、勅令第九百二十二号「陸軍現役下士官補充及び服役臨時特例」によって、特別幹部候補生が誕生した。

翌十二月十五日の『朝日新聞』の朝刊に、「陸軍に特別幹候生 一年で優秀な下士官を養成」と、四段抜きの大きなタイトルで掲載された。その内容は、

「陸軍では、戦局の要請に即応するため、今度、少年兵の『兄さん兵』ともいうべき『特別幹部候補生』を新設し」と書き、「新制度は、これまでの幹部候補生あるいは特別操縦見習士官と少年兵の中間に当たるもので、制度としては、国軍の幹部である下士官養成の点で、従来の少年兵に類似しているようであるが、教育期間が短い点と、決戦下にふさわしい敵前下の実地訓練に重点が置かれていることが特徴である。今回の新制度の創設によって、皇国のあらゆる青少年層に、等しく陸軍幹部として進む道が完備されたことになった」

と、報道された。

ところが、

「下士官になるのなら、乙種幹部候補生や少年飛行兵と同じではないか。やはり陸軍予科士官学校を受験することでしょう」

と、考えた中学生が多く、最初は志願者が少なかった。

急遽、昭和十九年一月二十九日付の『朝日新聞』に、

「この制度が単に下士官のみの養成機関であるかに誤解している向きもあるが、実際には、採用後一年半で伍長に任官、そのうち中等学校卒業または特殊技術所有者中の優秀者は直ちに軍曹に任官、その後累進して軍曹、曹長、准尉の階級にあるものには、乙種学生（在学一年）の受験資格を与えられ、最も早い者は四年ぐらいで少尉に任官できるもので、ほとんどすべての特幹に将校昇進への途が開かれており、さらに多数少年の蹶起（決起）応募が要望される」と、書いた。

特別幹部候補生に「特幹」という略称を用いたのは、この記事が最初である。

乙種学生と書いているのは、実際は文字が似ているための己種学生の間違いであつた。

説明を加えれば、陸軍士官学校や陸軍飛行学校の己種学生で、准尉や実役停年（実際に兵役に服した期間）四年以上の曹長や飛行機操縦術を修得した実役停年三年以上の軍曹が受験して、連隊長が選抜する少尉候補者のことである。軍隊に入ってから知つたが、この試験は格別な難関であつた。

新聞報道には、この内容を詳しく書かなかつたので、いかにも全員が、陸軍士官学校を卒業した人たちとほとんど同じ年齢で、現役将校になれるものと信じた。

私の場合、無事に生き残っていれば、二十歳で准尉になり選抜されれば少尉になれるのかと思

った。

昭和十九年採用の特別幹部候補生の中で、四月入隊でも、八月入隊でも、入隊後に、すべての特別幹部候補生が将校になれるという意味ではないことを知って、

「辞めて帰って陸軍予科士官学校を改めて受験し直したい」

と、申し出る候補生が続出し、内務班長が、

「自分のような年齢になつても、お国のために働いているのだから、この激しい戦局では、将校になることよりも、一刻も早くお国のためになる人間になることが大切である」

と、説得し撤回させた。

その結果、昭和二十年採用の特別幹部候補生の募集要項の、「特別幹部候補生の待遇及び将来」の3が、「伍長又は軍曹任官後は、逐次進級し准尉に達し、曹長任官後二年以上を経たる准尉は、将校に抜擢される」と、変更された。一見したところでは待遇改善のように見える。

その後も、特別幹部候補生の待遇が改められて、沖縄周辺での艦船特攻に志願し、戦死した人たちは、普通は二階級特別進級だったが、少年飛行兵と特別幹部候補生は、さらに特別な進級で、戦死の日付で少尉に任官した。

特別幹部候補生の普通の戦死者や殉職者は、一階級昇進し、兵長で戦死すれば伍長になった。

昭和十九年採用第前期と第中期の生存者は、終戦の特別措置で伍長または軍曹に進級したが、終戦になったので、その後の結果を見極めることはできなかった。

特別幹部候補生が、階級にとらわれたのは、入隊までであった。

軍隊で厳しい訓練を受けると、そのうちに、「一等兵のまままで戦死しても良い」と思うようになり、実戦に参加して実態を知ると、「どうせ、任官までは生きていられないだろう」と思うようになった。

この『朝日新聞』の報道を読んで、現役将校になれるのならば、中学生や徴兵年齢の引き下げで現役兵として入隊する直前の青年の応募者が、爆発的に増えた。

昭和十九年一月二十九日の『朝日新聞』には、東京の法政中学で、一校の特別幹部候補生志願者が百名に達したと報道された。

中には、視力が不足で身体検査不合格となった中学生が、血書で検査官に手紙を書き、採用を願ひ出たという美談も報道された。

同志社中学は、校長先生が戦艦の艦長も経験した海軍大佐で、数学の先生も日本海海戦に参加し負傷した海軍大佐、物理の先生も海軍少佐で、守衛さんは全員が海軍下士官の傷痍軍人であった。

それだけに、同志社中学では、海軍兵学校や甲種飛行予科練習生の志願者は多かったが、陸軍の志願者は少なく、特別幹部候補生の志願者も、全校で二十名程度で、それほどでもなかった。

「昭和十八年召集の少年飛行兵生徒を志願した者で、特別幹部候補生を志願する者に限り、特別幹部候補生の志願票を提出せずに、少年飛行兵生徒の志願票提出先にその旨届け出ること」と、

官報に告示されたが、私は、「どうせ不合格になっているのだろう」と、特別幹部候補生の志願票を提出した。

特別幹部候補生の採用試験は、身体検査で相当に厳選され、学科試験も厳しく、『朝日新聞』の報道によれば、結局十数名に一名が合格し採用された難関となり、十名ほどが志願した同級生は、身体検査でほとんどが不合格になった。

同志社中学の級友で弁護士になった中坊公平さんも、テレビでも話していたが、飛行兵種の特別幹部候補生を志願して、視力が航空の特別幹部候補生としては不足で不合格となり、他の同級生と共に、学徒動員で兵庫県伊丹市の工場へ行つて、無線機を作り、大変な苦勞をしたという。

裸眼視力〇・六、矯正視力〇・八が、航空・船舶の特別幹部候補生の合格の基準だが、志願者が多くて、実質的には、合格して入隊した同期生の裸眼視力は、ほとんどが一・〇以上だった。合格基準を満たすような軽い近視でも、視力不足として身体検査で不合格になったようである。

当然のことながら、第三十一航空通信連隊の同じ中隊の同期生にはメガネをかけた人は極めて少なかった。

航空兵種や船舶兵種の場合、視力の良否が状況を判断するために大切な条件で、戦闘中には生死の運命を分け、万一にもメガネを破損するようなことがあれば、自分自身の命に関わるので、裸眼視力の良さを求めた。

結局、同志社中学の同級生で採用されたのは私一人、上級生が二人だけであった。

私は、第一志望に操縦を志望したのに、入隊のときには十五歳五カ月で、年齢が低かったためか、採用されたのは第二志望の航空通信であった。

陸軍史上最年少の戦務

地一号や地二号や対空二号などの大型で高性能の無線機を使い、司令部間や指揮下の部隊との通信網を構成する「指揮通信」の訓練を受けるため、三重県・滋賀県・石川県以西の特別幹部候補生採用者は、兵庫縣篠山町（現在の篠山市）に新設された現役兵と特別幹部候補生のための短期養成を行う航空通信教育連隊の、秘匿名中部第一百部隊、正式の部隊名では第三十一航空通信連隊に、入隊した。

この連隊では、昭和十九年四月二十日に入隊した第前期の特別幹部候補生は、七月末に特別幹部候補生課程を修了し、甲種幹部候補生合格者だけが残り、航空通信学校の召集下士官学生に分遣されたり、三重県^{さいくう}斎宮にある第七航空通信連隊に転属したりしていた。

私たちは、第中期で、昭和十九年八月十五日に入隊し、第三十一航空通信連隊での四カ月の特別幹部候補生航空通信課程の教育を受けることになっていた。

入隊後一カ月半を過ぎた九月末に、一千名の同期生の中から二百名が、暗号要員として、水戸の陸軍航空通信学校に分遣された。通常なら四カ月から六カ月を要する召集下士官学生暗号課程を、午前・午後・夕食後と教育があつて、学課の最後にはストップウォッチを手にした教官が試

験をしてその場で採点し、試験また試験の猛烈な速成教育で、一カ月で修業（卒業）した。

その中の、成績上位三十名が陸軍航空総監部に転属し、昭和十九年十一月から、東京市ヶ谷の陸軍中央官衙の奥まった一角にあった防衛総司令部の防弾作戦室に勤務した。

二百名の同期生の中の八十五名が熊本の菊池教育隊へ転属し、九州全域の司令部や飛行戦隊に展開した。残る八十五名が新田原教育隊に転属し、中国大陆にあった第五航空軍の戦域に展開した。

かくして、私の場合は、陸軍史上最年少と思われる十五歳八カ月で、防衛総司令部防弾作戦室の戦務に就いた。

その後、航空総監部と第十三航空通信連隊との合計三回の転属をした。

航空通信教育連隊に入隊し、航空通信学校に入校して教導隊での召集下士官学生暗号課程、陸軍航空総監部に転属して、市ヶ谷の陸軍中央官衙にあった防衛総司令部防弾作戦室、航空通信学校吉田教育隊の第十七期少年飛行兵甲種生徒の内務班付、航空通信学校教導隊での集合教育、そして防衛総司令部防弾作戦室に復帰した。ほどなく、防衛総司令部と陸軍航空総監部が休止・統合された航空総軍司令部に転属し、今度は、第六航空軍司令部、そして第十三航空通信連隊に転属した。

第十三航空通信連隊から分遣されて、飛行第四十七戦隊、飛行第二百四十四戦隊、飛行第五十三戦隊、飛行第十八戦隊と、展開通信分隊の業務を経験するために、短いものでは三日間の配属を

含めて、飛行基地を転々とした。

その後、連隊に呼び戻されて暗号集合教育の助手、航空通信連隊の関東松山通信所、終戦になって、埼玉県高麗川に移駐していた中隊本部に帰つての残務整理などと、細かく数えると、一年間に十五回以上の転勤を経験した。

その間、昭和二十年二月十六日早朝の艦載機の関東地区空襲を、水戸陸軍航空通信学校の飛行場で経験した。機関砲で撃たれ、通り過ぎると葉莢がガラガラと降つてきて、周囲は穴だらけとなり、コルセア戦闘機から白い棒が離れたと思つたら、たちまち戦闘機を追い抜き、目の前にミサイルが飛んできて、その速さと爆発の威力に驚いた。

その後も、度々艦載機の銃撃を経験し、東京調布市の柴崎にあった第十三航空通信連隊では、近くの第一中隊に一トン爆弾が落ち、特急列車が間隙を走るようなすさまじい爆弾の落下音と、大地を揺るがす大音響と、地震のような振動と、強烈な爆風を経験し、世にいう弾の下もくぐつた。

軍隊での勤務も、中隊では週番上等兵や週番下士官見習、衛兵は、表門歩哨に始まり、歩哨掛や衛舎掛になって衛兵司令の勤務を見習い、実戦では、関東地区の各飛行場に展開している指揮通信の通信分隊の諸勤務に至るまで、下士官までのすべての勤務を経験し、何でも見て勉強しようとの学習意欲と、旺盛な好奇心で、他の人の見なかったようなところまで立ち入って、陸軍をじっくりと見てきた。

階級も、十五歳から十六歳の一年間に、一等兵に始まり、上等兵から兵長と進み、終戦の特別措置で、「昭和二十年八月以前に兵長であった特別幹部候補生は、伍長又は軍曹とする」と告示されて、任官が六カ月早まり、八月二十日付で十六歳五カ月で軍曹になった。

二等兵と伍長の経験はないが一階級ずつ昇進して、四階級を経験した。もともと、軍曹になっていることを知ったのは、ずいぶん後になってからであるが。

実戦参加も、単に戦っただけではなくて、軍歴には、東二号作戦に従事した際の功績も記録されている。

戦後になって、陸軍の将校たちを、馬の糞と書いた海軍出身の作家もおられるし、海軍軍人のスマートさに比べて、陸軍軍人は野暮の象徴のように書いている人たちもいるが、私の見てきた陸軍の将校や、中央官衙で触れた陸軍士官学校出身の高級将校たちは、そのような人たちではなかった。幹部候補生出身の将校や、たたき上げの下士官や准士官も、温かい良い人たちであった。

第三十一航空通信連隊での中隊長の塩谷実中尉は、東京商大（現一橋大学）出身の丸紅の社員で、区隊長の大石勇少尉は、横浜高等商業学校出身の東京芝浦電気の社員だった。内務班長の大畠次郎伍長は、兵庫県の警察官で素晴らしい人格者だった。

少年飛行兵や特別幹部候補生の教官や内務班長には、立派な人物を当てていたに違いない。

陸軍士官学校に入った人たちは、旧制高等学校に入れるような学力を備え、その上に、健康に恵まれていたから、合格し厳しい教育に耐えてきた。



特別幹部候補生募集ポスター

陸軍士官学校出身の将校の間には、石頭をスタインといい柔軟な思考の人をグシヤというスラングがあるほど、柔軟な思考が尊重された。文学が好きだったり、誠実で教養のある、しかも部下に対しても思いやりのある、礼儀正しく、物静かな人たちであった。

指揮官は教育者であると陸軍では言っているように、指揮官の多くは教育者としても尊敬できる人たちであった。

たまには、つまらない人もいたが、それは一般の社会も同じである。

このような陸軍での体験で、今まで書かれなかった日本陸軍の司令部や部隊勤務と、あまり知られていない特別幹部候補生の活躍を、詳しく書き残すことにした。

この本が、軍隊を経験した方々が、昔を思い起こされるよすがとしてはもとより、軍隊の経験を持たれない方でもわかりやすいように説明を加え、自衛隊の方々にも、現在の服務との関連で、日本陸軍はこのようなものだったと、理解していただけるように、後世への記録として書き残し